



インクブロット法を用いた幼児のシンボル表象発達に関する予備的研究

相澤, 直樹
田中, 孝尚

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 18(2):69-78

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100494064>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100494064>



インクブロット法を用いた幼児のシンボル表象発達に関する予備的研究

A Preliminary Study of the Development of Symbolic Representation in Young Children using the Inkblot Method

相澤 直樹*

田中 孝尚**

Naoki AIZAWA*

Takanao TANAKA**

要約：本研究では、シンボル表象の観点からロールシャッハ・インクブロット法を検討する目的で、幼児を対象とする予備的調査研究を実施した。対象は関西圏の大学附属幼稚園に通う幼児15名であり、調査は10枚のインクブロット図版を用いて一対一の個別法で実施された。得られたデータのスコア集計、ならびに、結果の質的な分析を通じて、各年齢の反応特徴と発達の変化を検討した。その結果、4歳から5歳にかけて明瞭な発達のな変化がみられた。すなわち、関わりの様態において感覚的で即座的な反応産出から、一定の時間をかけた「見立てる」過程が介在するようになるとともに、把握型では幼児に特有とされる全体反応の減少と正確な形体認知に基づく反応の増加が観察された。体験型においては4歳のpure C反応が減少し、色彩反応の特殊型の出現がみられた。一方、5歳から6歳にかけての発達の変化は複雑であった。関わりの様態では、「見立てる」過程の介在が反応数の増加をもたらす一方で、把握型ではむしろ正確な形体認知に基づく反応の減少が観察された。体験型では、赤色の反応決定への典型的な参加が認められた。全年齢にわたって運動反応の出現は限定的であった。今後は、多数の調査協力児を対象とする調査研究を通じて、上記の発達の特徴を検証する必要がある。

キーワード：ロールシャッハ・インクブロット法、シンボル表象、幼児期、投影法、心理発達

1. 問題と目的

近年幼児の心理的発達に関わる概念としてシンボル表象 (Symbolic Representation) が注目されている (Callaghan & Corbit, 2015)。ここでシンボル表象とは、シンボルを介して直接的には知覚されていない事物や事象を喚起する意図的な思考活動のことを指す (Piaget, 1951/2007)。またシンボルは、それ自体以外の何かを意味するために意図的に用いられる実体と定義される (DeLoache, 2000)。具体的には、ふり遊び、描画、絵画や写真などがあげられる。特に表象思考の発達に関連するものとして、子どものシンボル表象に関する膨大な研究がおこなわれてきた (Callaghan & Corbit, 2015; Müller & Racine, 2010)。

シンボル表象の発達に関する古典的な研究として、Perner (1991) のメタ表象理論があげられる。Perner (1991) は、子どもの「心の理論」の獲得モデルとして、目の前の現実状況しか表象できない

一次的表象の段階、異なった状況を同時に表象できるものの、表象そのものの表象は成立していない二次的表象の段階、最後に表象自体の表象、すなわち、メタ表象が獲得されるメタ表象の段階の3段階を想定している。そして、メタ表象はおおむね4歳以降に獲得されると論じた。また、最近のシンボル表象に関する発達理論としては、DeLoache (2000) による二重表象理論がある。これは、表象理解の成立には、シンボル媒体そのものを表象すると同時に、そのシンボルが指示する事物との抽象的な関係を表象しなければならないとする理論で、媒体の性質によりシンボル表象の成立の時期が異なるとしている。例えば、刺激として比較的シンプルな絵画は2歳半でシンボルとして使用できるようになるが、刺激としてより魅力的なスケール模型は3歳にならないと利用できないとしている。

以上のほかにも、シンボル表象の発達にはさまざまな理論が提起されているものの、最新の研究では、

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 准教授
** 神戸大学附属学校部附属幼稚園小学校 校園長

(2024年9月27日 受付)
(2025年1月29日 受理)

暗示的な (implicit) シンボル表象理解と明示的な (explicit) それとの区別する観点が論じられている。これは、ふり行為の発達に関する論争から生じてきたものであり、行為 (や知覚) に基づく表象理解と概念や言語に基づく表象理解を区別する (Lillard, 2015; Rakoczy et al., 2006)。この議論の中で、それらが成立する時期についてはいまだ見解が分かれている。一例としては、ふり行為の研究では、暗示的な理解は2歳ごろには成立するのに対し、明示的な理解の成立は児童期前期を待たなければならない (Lillard, 2015)。

一方、ロールシャッハ・インクブロット法 (以下、インクブロット法) も、これまで長年にわたり臨床心理学の分野を中心に、心理テストの一手法として活用されてきた。この手法についても従来比較的多数の発達的研究がなされている。

最も初期の研究の一つとしては、Meili-Dworetzki (1956) が挙げられる。Meili-Dworetzki (1956) は、幼児から学童期までの幅広い対象にインクブロット法を実施し、その特徴を詳細に検討した。例えば、最も幼い子どもが示す全体反応の特徴を記述している。それは、インクの染みを背景 (地) の上にある形象 (図) としてとらえたもの (実際の反応としては Perseveration が対応する)、灰色の陰影から漠然とした意味づけを引き出したもの、インクの染みの大まかな形状が用いられたもの、部分的な認知のみで全体を決定づける部分決まりの全体反応である。そして、その後の発達ではより分析的な部分反応に向かうとしている。また、辻 (1997) は、Meili-Dworetzki などの先行研究を参考にしつつ、学童期の初期に部分反応の増加と正確な形体認知が併存する時期があることをみだし、それを初期集約的把握型と定義した。

そのほか、Fox (1956) は、幼児期のインクブロット反応の発達を三つの段階に分けている。すなわち、図版に関係なく同じ反応を繰り返す Magic Wand Perseveration の段階、部分決まりの全体反応が増加する Confabulation の時期、その後、正確な部分認知は増加するものの、それらが適切に結合 (統合) されない Confabulatory Combination の時期である。また、この発達論を下敷きに、最近では Leichtman (1996) がインクブロット法習得の過程を論じている。

相澤 (2016, 2022) は、臨床心理学の観点からインクブロット法をシンボル表象の一形式として理解する試みを提起している。つまり、インクブロット法は、シンボル表象とその発達の観点からより深く理解できるとする。また、インクブロット法は、シンボル表象の発達を研究する上での利点のある手法であることも提起している (2024)。しかしながら、

これらの理論の妥当性を検討するためには、シンボル表象の発達の観点から幼児を対象とした調査研究が必須である。しかしながら、その研究はいまだなく今後の課題となっている。今回の研究では、そのような研究の予備的な検討を行うため、4歳から6歳までの幼児に実施したインクブロット法の分析結果を報告する。それぞれの段階のスコアの概要とその発達の変化を検討するとともに、各年齢段階のインクブロット法の結果の質的な検討を通じて、幼児のインクブロット法の発達に関する予備的な知見を得ることを目的とする。

2. 方法

(1) 調査協力児

関西圏にある大学附属幼稚園に在籍する園児 16 名。うち 1 名は調査実施の不備のため、以後の分析には含めなかった。調査協力児の内訳は Table 1 のとおりである。

Table 1 調査協力児の内訳

	人数	平均月例	男児	女児
3 歳学級	5	48.0(0.7)	2	3
4 歳学級	5	60.4(0.6)	1	4
5 歳学級	5	72.6(1.8)	2	3

(2) 調査方法・調査機関

調査は、園児の降園後の時間を利用して実施された。実施場所は園内の保育室と遊戯室であった。執筆代表者、ならびに調査協力者の大学院生、大学生がロールシャッハ図版国際版の 10 枚を用いて個別形式で実施した。なお、記録は主にビデオカメラによった。調査は、2024 年 2 月から 3 月にかけて実施された。

(3) 倫理的配慮

調査にあたっては、調査協力児の保護者に書面により調査の目的、方法、調査協力の任意性等について説明し、保護者からの書面による同意を得た。なお、本調査は、調査実施先である大学附属学校部に設置された研究倫理審査委員会の承認を受けて実施された (受付番号 168)。

3. 結果

各調査協力児のインクブロット法の結果を阪大法のスコアリング法に従ってスコアした (辻・福永, 2018)。なお、通常インクブロット法のスコアリングにあたっては、複数の調査者がスコアリングを行い、その一致率等を検討する手法をとることが多い。しかし、今回の研究では、下記のような幼児の反応の特徴のため、そのような手続きが困難であった。そこで、幼児の反応特徴を踏まえ、次項に示すよう

なスコアリングの手続き基準を設定し、執筆代表者がそれに従ってスコアした。各年齢学級、ならびに、調査協力児全体の主要スコアの平均値を Table 2 に示す。

(1) インクプロット法実施時の幼児の様子

幼児は、インクプロットの実施に際して成人とは異なる特徴を示す。以下では、本研究で観察されたインクプロット法実施時の幼児の特徴を報告する。

幼児は、インクプロット法に興味関心を抱きにくく、10枚すべての図版を実施していると他のことに注意が向きやすい。もともとインクプロット法は、インクの染みを何かに見立てる遊びから派生したといわれる。しかし、幼児にとってこの手法はあまり興味を引くものではない。最初幼児はこの実施者からの呼びかけに一定の関心を示す。しかし、数枚のカードを実施した時点で、関心が弱まる傾向がみられた。そのため、実施者は、常に子どもを励ましたり褒めたりするように留意しなければならなかった。以上のような傾向は、とくに年少の幼児において顕著である。

見知らぬ人や課題に対する緊張感も幼児に特有の反応であった。幼児にとって調査実施者は日ごろからなじみのない人物である。また、インクプロット法も、ほとんどの幼児にとっては経験のないものであった。これらの慣れない体験に対して、幼児は一般に緊張感を示す。この傾向も年少の幼児に顕著であった。したがって、今回の調査においても、実施前に適宜話をするなどの対応が必要であった。また、カードに対して一つも反応することができない Response Failure はほとんど最初のカードで生じている。このことも未知な課題に対する緊張の影響を見ることができる。ただし、今回の調査では、実施場所が普段から慣れ親しんでいる園内であつたこともあり、ほとんどの幼児は調査実施者にすぐに慣れを示した。インクプロット法についても2, 3枚目以降のカードでは、ほぼすべての児童が反応をすることができた。

幼児の反応は、調査実施者からの働きかけからより強く影響される。前述のように幼児に対しては、一般に実施者からの励ましや促しが常に必要である。とくに年少の幼児の場合、注意を維持したり反応を産出したりするために、実施者の働きかけが必要となる。そのため、より一層実施者からの働きかけに影響されることになる。反応数は、幼児の自発性や生産性を反映するだけでなく、実施者の促しの頻度に大きく左右される。カード回転も同様であり、実施者からの促しにしたがって、カード回転をすることが多い。質疑においても同様であり、実施者からの確認の質問に対し、多くの幼児は肯定的な頷きで反応する（ただし、幼児の中にはきっぱりと否定

Table 2 主要スコアの平均値

	3歳学級	4歳学級	5歳学級	全体
R	17.6	15.2	19.4	17.4
Fail.	0.8	0.6	0.2	0.5
RT(Av.)	26.24	30.04	22.88	26.4
RIT(Av.)	7.6	14.14	16.28	12.7
RIT(Av.N.C.)	5.8	12.12	16.48	11.5
RIT(Av.C.C.)	9.02	16.7	16.32	14.0
RC(Av.)	1.32	2.92	4.34	2.9
W%	66.68	66.18	66.26	66.4
D%	18.3	26.52	27.02	23.9
d%	3.2	3.7	0	2.3
Dd%	13.44	3.64	6.7	7.9
F%	76.44	68.36	81.18	75.3
FC	0.2	0.2	0	0.1
CF	1	2	1.2	1.4
C/F	0.4	0.6	0.8	0.6
C	0.6	0.2	0	0.3
M	0	0.4	0.4	0.3
FM	0	0.4	0.2	0.2
m	0.4	0.2	0	0.2
F+%	32.6	50.9	48.06	43.9
Fpm%	29.72	27.78	12.64	23.4
F-%	37.68	21.34	39.3	32.8
P%	12.78	13.7	19.6	15.4
A%	58.9	48.16	65.2	57.4
H%	8.02	9.18	5.28	7.5
CS%	40.82	29.32	22.34	30.8
AS%	57.14	52.58	69	59.6
(VIII-X)%	28.12	22.84	28.16	26.4
AQ	40.38	55.28	58.44	51.4

するものもいる)。したがって、年少児になればなるほど、質疑においては実施者の誘導的な質問による影響を受けやすい。

そのほか、一部の幼児は、実施中に体を動かしたり、カードを使って遊びだしたりする様子がみられた。本研究の協力児は、先行研究と比較するとかなり落ち着いた様子で調査に取り組むことができている (Ames et al., 1974/1995; Ford, 1946)。しかし、一部の幼児には、調査実施中に椅子から身体をずらしたり、足踏みをしたりなどの行動がみられた。ただし、完全に席を立ってしまったたり、その場を離れてしまったたりするような子どもはいなかった。その他、実施時間中、カードを使って遊びだすこともあった。最も多かったのは、カードをテーブルに当てて音を出すことであった。そのほか、カードのふちを

指ではさんでこすったり、表面を手でさすったりする様子も見られた。これらは感覚遊びの一種であり、カードの物理的な性質から引き起こされたものと思われる。

そのような特徴と関連して、幼児の反応には自分だけが知っている架空の概念やキャラクターによる反応が多くみられた（例として「怪獣」、「お化け」、「妖精」など）。また、テレビやゲームなどに影響を受けたと思われる反応もかなり含まれた（例として、「手怪獣」、「テモンガ」など）。これらの反応については、幼児が以前に実際に見たものを答えている可能性も考えられたが、その都度都度の思い付きや創作で反応しているようであった。そのため、質疑での確認が困難な場合が少なくなかった。

さらに、今回の調査で最も特徴的であったのは、質疑段階での幼児の様子であった。幼児の質疑は一般に非常にシンプルで部分的なものにとどまる傾向がみられた。多くの幼児が反応を説明するに際して、図版の一部を指し示すことにとどまる。また、部位の説明に際しても、その部分を呼称するのではなく、擬音語や擬態語だけで説明することが多くみられた（「ここがシュッとなっている」や「（図版の突起部を示しながら）ここがこうなって、こうなって…」など）。そのため、調査実施者はしばしば追加の説明を求める必要に迫られた。しかし、何度も説明を求めることは、幼児の関心や意欲を低下させることが懸念された。さらに、前述のように実施者からの確認の質問は、幼児に取っては誘導的な効果を引き起こしやすい。以上のようなことから、実施者からの質問には限界があり、どうしても質疑の情報が不十分なままにせざるを得なかった。

以上のような年少児特有の反応時の行動や表現上の様子は、一般的に調査の実施やスコアリングの困難に結びつきやすい。そのため、それらの発生を防止するような諸種の手続きが提案されることがある（Ames et al., 1974/1995; Ford, 1946）。しかしながら、上記のような特徴は、幼児にとっては自然な反応であるともいえる。また、以下に論じるようにインクプロット法の反応特徴にも関連するものが含まれる。したがって、過度に排除したり抑制するのではなく、幼児のそのような特徴に合うように、実施法やスコアリング手続きを工夫することも必要である。今回の研究では、幼児の以上のような特徴を考慮して、スコアリングの手続きにおいて、以下のような基準を設けた。

①質疑での説明が不十分な場合にでも、インクプロット法の先行研究データ（辻・福永, 2018）を参考にしながら推定により補ってスコアする。

②反応領域のスコアに際して、領域に関する説明が部分的であっても、当該領域、ないしは、当該領

域を含む広い領域に高頻度に出現する反応を参考とし、推定によりスコアする。

②反応決定因のスコアに際して、質疑において形体、色彩や明暗陰影の使用に関する明確な説明がない場合にでも、それらの関与が推測される反応については推定によりスコアする。なお、運動反応と結合反応については、実施段階で運動表現がない限りスコアしない。

③形体水準のスコアに際しても同様に、先行研究で高頻度に見られる反応などの情報を参照し、推定に基づいてスコアする。

④幼児によくみられる架空の事物の概念による反応（怪獣、お化け、妖精、そのほかのキャラクターなど）については、辻・福永（2018）の「特殊な表現の基礎形体水準の判定例」の「非現実概念表現」のスコア手続きに従ってスコアする。つまり、当該領域で「人間」や「動物」が成立する場合には Fpm、そうでない場合には F- とスコアする。

以上のような追加的な基準を用いてスコアリングをおこなった。ただし、この手法は一般的に推奨されているわけではなく（Ames et al., 1974/1995）、また、実際の幼児の反応要因を正確に抽出できているかについてはなお疑問が残る。しがたって、本研究の分析では、スコアとその集計結果については参考程度にとどめ、個々の幼児の反応の分析とそこから抽出された各年代の反応特徴の質的な検討に重きを置くこととした。以下では、結果として各年代の反応の特徴を細かく記載し、それらを踏まえて各年代間での反応の変化について考察する。

(2) 各年齢のインクプロット反応の特徴

① 4 歳児の特徴

a) かかわりの様態に関する特徴について この年齢の幼児にとって、インクプロット法に反応することはまだ難しい。このことは、この年代の Response Failure の多さに現れている。5 名中 2 名で 1 枚のカード以上で Failure が見られ、その内の 1 名は 3 枚のカードで反応をすることができていない。一方、反応数そのものは必ずしも少なくなく、一定程度の反応数を出せている。ただし、これは前述したように実施者の促しによる影響が大きいいため、この年代の幼児の本来の特徴といえるかどうかは疑問である。とくにこの年齢で特徴的であるのは、初発反応時間の短さである。平均初発反応時間の短さに見られるように、4 歳児は図版を見てすぐに反応する。このことは、子どもたちの反応が感覚的で即座的なものであることを示唆している。これと類似した特徴として、この年齢の何名かでは実施時の体の動きが大きくみられた。それと同時に、それらの子どもは、驚きや感嘆などの情緒的反応も比較的豊かであった。そのほか、興味深い特徴としては、

ジェスチャーや自分自身の身体を用いて反応を説明する子どもが多くみられた。ごっこ遊びのようにしてまねごとをしたり、自分自身の身体の部位を指して説明することもみられた。これらはこの年齢の幼児に特徴的である。

b) 把握型の特徴について 反応領域の特徴としては、全体反応が優勢な領域選択が多い。5名中4名が70%を超えるW%を示している。そして、その中には、先行研究で示された幼児の全体反応の特徴(Meili-Dworetzki, 1956; Fox, 1956)が多く含まれる。つまり、灰色の陰影から漠然とした印象を引き出した反応、図形の形状を大まかにとらえた反応、部分だけで全体を決定づけた反応(DW)である。1名の反応では、自分自身の興味関心に基づく反応のPerseverationがみられた。ただし、この年代のすべての幼児でそのような特徴が目立つわけでは決していない。1名は、非常に多くの部分反応を示した。また、別の1名は、正確な形体認知に基づく全体反応を多く示した(この例は後に収縮反応のパターンとして取り上げる)。したがって、幼児の領域選択は実際にはかなり多様なものである。それらに共通する一般的な特徴としては、直接的な領域選択をあげることができる。つまり、4歳児は、図版図形を見た瞬間に反応している。この瞬間では、図版図形の全体領域が刺激として参加してきている。その際、幼児は、全体への反応を示唆するような説明を行うかもしれないし、逆に部分領域だけを指示するような説明を行うかもしれない。それぞれの幼児の説明によって、結果としての領域スコアは変わってくる。しかしながら、このような直接的な領域選択では、そもそも「見立てる」という作業の介在がいまだ生じていない。したがって、厳密な意味では、反応は図版図形の特定の領域に定位されていないといえる。そのような意味では、領域は定まっていなかったということがこの年齢の領域選択の主要な特徴であると理解できる。

c) 体験型の特徴について 反応決定因については、他の年齢児と同じく、基本的には形体のみに基づく反応が多く、F%が高くなっている。いいえならば、そのほかの要因、すなわち色彩要因や運動要因が反応決定に使用されることはいまだ少ない。狭義色彩反応については複数の幼児で見られるが、その多くが典型的なpure C反応である(例えば、「(桃色だから) 桃」、「水」、「虹色」)。そのほか比較的多くみられたのは、色彩だけでアニメキャラクターを答えるものである(例えば、VIIIカードのピンクと緑から「アリエル」、ピンクから「オーロラ姫」)。これらの反応では、形体認知との複合が生じていない。一方で、運動反応はほとんどみられない。わずかに無生物運動反応がみられただけで、人

間運動反応や動物運動反応はない。むしろ、子どもたちの運動感覚は、実施時の体動や身振り、ジェスチャーに直接的に示されているように思われる。前述のように、この年齢の幼児の反応や説明では、直接的な体の動きやジェスチャーが多くみられる。その中に幼児の運動感覚は活発に表現されており、運動反応としての表出には至っていない印象が持たれる。

d) シンボル表象の観点から

インクプロット法をシンボル表象の一形式とみなした場合、4歳児の反応で最も注目されるのはその反応の直接性である。前述したようにこの年齢の子どもの反応は一般に非常に早く、図版図形を見た瞬間に答えることが多い。このことは、感覚的な水準で何かを思い浮かべることができていると同時に、いわゆる「何かに見立てる」という過程の介在が少ないことを示唆している。そのことは、それぞれの実際の反応の特徴にだけでなく、質疑の特徴に現れている。この年齢では質疑での説明にかなりの困難さがみられる。多くの場合、ごく単純で部分的な説明にとどまる。このことは、シンボル表象の過程に含まれる何らかの事物を「再現する」ことに関連している。この時期の子どもの反応では、インクの染みを何かに見立てるに際して必要な「何か別の事物を再現する」という過程がまだ十分に作用していない。インクプロット法の実施段階でもこの働きは求められるが、同時に実施段階での反応を説明する質疑段階でも同じ作業が求められる。したがって、この年齢の幼児には質疑での説明が困難なのである。

② 5歳児の特徴

a) 関わりの様態に関する特徴について この年齢では、反応数は全体的に小さめである。かつ、実施者に促されての反応産出がなお目立つ。一方、初発反応時間は長くなっている。また、実施者に促されたことによるカード回転がいまだ多いものの、自発的な回転もかなりみられる。また、4歳児と比較すると、検査実施時の体動が大幅に減少している。5名中1名の幼児に、なお椅子からずれて座ったり、腰を持ち上げたりする様子が見られた。しかし、それ以外の幼児は、一定時間静止して図版を見続ける様子が見られた。以上の5歳児の特徴からは、実施段階において「何かを見立てる」という過程が媒介していることが推測される。幼児の反応は、いまだ基本的には感覚や印象に基づく直接的なものである。しかし、その中でもインクの染みを何か別のものに見立てようとする意図的な努力が感じられる。

b) 把握型の特徴について 反応領域の分布では全体反応が優勢な特徴を示した幼児が2名みられる。ただし、残りの3名は部分反応が増加してきており、すべて無色彩カードでは全体反応が優勢、色彩

カードでは部分反応が優勢な特徴になっている。このことは、色彩の感受による受動的な分割が生じてきていることを意味する。ただし、4歳児と同様のなお先行研究で示された幼児特有の全体反応(Meili-Dworetzki, 1956; Fox, 1956)がみられる。つまり、大まかな形状に基づく反応、ならびに、部分決まりの全体反応(DW)である。しかしながら典型的なPerseverationは見られない。この年齢での特に目立つ変化は、正確な形体認知に基づく反応の増加である。このことは、Table 2のF+%の変化に示されている。60%近くの比較的高いF+%を示す者が3名みられた。ただし、それらの正確な形体認知に基づく反応も、比較的容易に思い浮かんだ場合に限られるようである。あるいは、1名の幼児では、インクの染みと着想(記憶象)の不一致が「お化け」、「変な人」などの表現の変更により解消されていた。そのほか1名の幼児は、先行研究で幼児の過渡的な反応特徴として論じられているConfabulatory Combinationを示していた。すなわち、いくつかの見たイメージを図版の方にあるかのように体験し、相互に結び付けていくために、大きさのアンバランスや不自然な結合を示してしまうのである。以上のような幼児の反応は、この年齢の過渡的な特徴を示している。つまり、正確な形体認知による見立ては可能となっているものの、それらのイメージを柔軟に処理することはいまだ難しいのである。

c) 体験型の特徴について 体験型では、この年齢でもF%が基本的に高率を占める。それ以外の色彩要因、運動要因の反応決定因としての参加はいまだ少ない。ただし、色彩反応については、pure Cとスコアされるものは減少してきている。それに代わって、いわゆる色彩反応の特殊型がみられるようになる。すなわち、不特定色彩反応、強制色彩反応、色彩命名である。そのほか、赤色の参加が推定されるものの、色彩への言及がないもの(多くの場合、IIIカード中央赤色部の「リボン」や「ネクタイ」)、刺激度の低い青色が反応に用いられたもの(VIIIカード中央青色部に「葉っぱ」)がみられる。以上のように典型的に狭義色彩が反応決定に参加しているものは見られない。運動反応の産出もかなり微妙である。つまり、1名では二つの人間運動反応がみられたが、一つは形体認知がF-で、もう一つは運動感覚の参加が不明瞭である(IIIカード両側赤色部に「バレイ」)、別の1名には二つの動物運動反応がみられたが、いずれも継時性を伴う。別の1名には一つの無生物運動反応がみられた。いずれも形体認知と運動感覚の複合は生じていない。なお、前2名の幼児で、下記で示すように実施段階での体動がほとんど見られなかったことは興味深い。

d) シンボル表象の観点から シンボル表象の観

点からみた特徴としては、前述した「見立てる」過程の介在があげられる。4歳児では何かが見えたらすぐに答える様子が見られたが、5歳児では一定時間図版を止めて見続ける様子が観察された。このことは表象思考が機能し始めていることを示唆する。同じ特徴は、質疑での説明の変化にも表れている。5歳児では、直接の体動やジェスチャー、擬態表現を用いることが減少している。それに代わって、幼児は図版を指し示しつつ口頭で説明をおこなえるようになる。このことは、直接的な体験としてではなく、事物を対象化してみることができていることを意味する。直接的な感覚や運動とは分離して、視覚的なシンボルを体験することができている。

③ 6歳児の特徴

a) 関わりの様態の特徴について この年齢になると、インクプロット法に対応することがおおむね可能となる。Response Failureを示したのは1名のみに、しかもそれもXカードの「最後まで(これまでのカードの)模様がすべて映っている」という反応で、単なるFailureとは異なる。また、1名の幼児は明らかに積極的に本課題に取り組んでいる様子がみられた。反応数は、これまでの年齢と比較して増加傾向にある。5名中3名が20個以上の反応を示している。初発反応時間も延長しており、各カードでの最初の反応までに時間をかけている。カード回転もほとんど自発的なものとなっている。実際の反応の様子では、最初からかなりの時間をかけて図版を見てから答える幼児がいる。このような幼児は、明らかに反応に際して「何に見えるか」を考えている。ただし、図版を見てすぐ答える、感覚的な反応を示す幼児もいまだ少なくない。ただし、そのような幼児でも、各カードの2個目以降の反応では、時間をかけて図版をみることが少なくない。そのほか、5名中4名の子どもがほとんど体動を示すことなく、静止して図版を見ていた。ただし、1名ではかなりの体動や動きが見られたので、この点ではいまだ個人差がみられる。

b) 把握型の特徴について

この年齢の反応領域の分布は多様である。5名中3名の幼児で、無色彩カードでの全体反応が優位、色彩カードでは部分反応が優位な、受動的な領域分布を示す。ただし、このうちの1名の幼児は、色彩の区分に従った領域選択というよりも、より狭窄した領域への反応をおこなっている。一方で、残りの2名は、無色彩カードと色彩カードのいずれでも全体反応優位な特徴を示している。また、先行研究で示されている幼児に特徴的な全体反応はほとんどみられなくなっている。Perseveration反応はみられず、1名の幼児が部分決まりの全体反応を示した。また、5歳児にみられたConfabulatory

Combination に近い反応が1名にみられる。その反面、Table 2の平均値に示されるように正確な形体認知による反応の比率は5歳児よりも低下している。5名中3名の幼児でF+%の値が50を切っている。この変化が不正確な形体認知による反応の増加によることが、同じ表のF-%の増加に示される。この結果は意外なものであるが、むしろ反応数が増加したことにより、反応が多様化したことに起因するものと考えられる。実際に6歳児の反応は、5歳児に比べても全般的に多様で、質的な統一性を見出すことが相対的に困難である。

c) 体験型の特徴について この年齢においては、色彩が反応に参加し始めることが観察される。まず、5歳児に広くみられた色彩反応の特殊型がほとんどみられなくなる。5名中1名で不特定色彩反応がみられたのみであった。また、4歳児、5歳児で認められた典型的なpure C反応は全くみられない。それに加えて、色彩を典型的に用いた反応がみられるようになる。そのほとんどの場合が「火」系列の反応であり、5名中3名において、赤色部に「火」系列の反応（「火」、「花火」、「焚火」など）が認められる。このように（pure C以外で）色彩（赤色）が主要な決定因となる反応が多くみられるのが特徴的である。また、上記の3名のうちの1名、また、別の1名では形体認知も関わる色彩反応（IIカードの中央上部赤色領域に「カニ」、同領域に「花」）がみられる。ただし、色彩反応は1名につき多くても2、3個にとどまり、個々の記録の中で占める割合はいまだ高くはない。また、上記の反応のほとんどで、色彩の使用に関する言及はみられない。したがって、色彩の反応への参加はいまだ萌芽的なものであると思われる。一方で、運動反応はこの年齢でもかなり限定されている。5名中2名に運動反応がみられたにすぎず、1名の動物運動反応は運動感覚の参加が不明瞭で、もう1名の人間運動反応は姿勢様運動反応である。以上のように運動反応の面では5歳児と比較しても、変化はみられない。

d) シンボル表象の観点から 関わりの様態に関する特徴でみられた反応時の様子の変化は、この年齢の幼児に特徴的である。幼児は、比較的長い時間にわたって図版を制止させたまま見つめて、何に見えるかを考える様子がみられる。このことは、反応産出過程の中に「インクの染みを何か他のものに見立てる」過程が介在していることを示している。また、実施段階、ならびに、質疑で体動やジェスチャー、擬態語表現が相対的に減少している。とくに質疑の中では言語的な説明が主流となる。このことは、刺激からの感覚的、反射的な反応が抑制され、対象化された視覚イメージが体験されていることを示唆している。ただし、1名の幼児ではいまだ体動やジェ

スチャーによる説明が多用されており、この点での個人差は大きいようである。そのほか、特徴的であったのは、1名の幼児で実施中にインクプロット法課題そのものに言及するような発言がみられたことである（IXカードで「(これまでのインクの染みについて) いつも何を思って描いているのか」、Xカードで「最後まで(これまでのカードの) 模様が全部映っている」）。これらの発言は、本課題を直接的に体験するだけでなく、課題そのものに問題意識を向けていることを示唆している。その意味で、前述したシンボル表象の明示的な理解の発生を指示している可能性がある。

④収縮型の反応プロトコールについて

以上の整理は、各年齢の特徴の概要をまとめたものであり、実際の個々のプロトコールの特徴はかなり多様である。その一つの表れとして観察されたのがいわゆる「収縮型」のプロトコールである。以下に示すような特徴を持つプロトコールが、各年齢に1名ずつみられた。

このタイプの記録ではいくつかの特徴が共通してみられる。まず反応数の少なさである。1カード1反応のパターンが最も多く、時にResponse Failureがあると反応数は10を切ることもある。次に反応領域はほとんどすべてが全体反応である。部分反応もみられなくはないが、全体の比率としてはかなり低い。さらに反応決定因では形体反応がほとんどを占める。1例のみ色彩反応の参加がみられたが、それ以外の2例ではF%が90を超えている。最後に正確な形体反応の比率の高さがあげられる。これは4歳児の例でもそうであって、同年齢の他の子の中では群を抜いている。以上のプロトコールは年齢を問わずみられるので、発達の要因とは異なる要因により規定されているかもしれない。なお、関連があるかどうかは明瞭ではないが、これらの3例では、言語表現がかなり進んでいる様子がうかがえたこと、そのほか、反応が見えない場合にはResponse Rejectionがみられたことである。これらの特徴が現れる背景には、シンボル表象の発達以外の要因が影響しているのかもしれない。

4. 考察

以上、スコアの主要な結果、ならびに、インクプロット法の結果の質的な検討から、各年齢の幼児の特徴について考察した。それらを踏まえ、以下では各年齢の幼児の発達の变化について検討を加える。

①4歳児から5歳児にかけての発達の变化

4歳児から5歳時までには以下のような変化がみられる。まず、インクプロット法への関わりの特徴に大きな変化がみられる。4歳の幼児も、実施者の

指示に従い集中して課題に取り組み、インクプロット法に反応することはできている。ただし、やはり個人、あるいは、カード特徴によっては反応が困難な様子がみられる。また、何らかの反応をするに際しても、感覚的に見えたものをすぐに答えるような即座的なものが多い。カードを見たらずぐに、あるいは、実施者に促されたらすぐに答えている。それとの関連で、検査中の体動やジェスチャーなども比較的多い。そのほか、擬態語を用いた説明などは、いずれもこの直接的な反応特徴に符合している。この点で、5歳児の反応時の様子は大きく異なる。5歳児は、ほとんどの図版に何らかの事物を見ることができる。いまだ即座的な反応も多くみられるものの、一定時間図版を見てから反応することが増える。それと呼応して、課題中の体動やジェスチャーが大幅に減少している。情緒的表現、擬態語の使用もかなり抑制される。この年代でもなお感覚や印象に基づく直接的な反応産出は多い。ただし、子どもたちは一定時間集中して課題に取り組むことができるようである。このことは、5歳児が「インクの染みを何かに見立てる」ことができていることを示唆する。

把握型についても4歳児から5歳児にかけて大きな変化がみられる。4歳児では、全体反応が大半を占める反応記録が多い。それに加えて、先行研究で幼児によくみられるとされる全体反応がかなりの数みられる。その最も初期のものとされる Perseveration もみられた。それに対し、5歳児になると、無色彩カードでは全体反応が優勢で、色彩カードでは部分反応が優勢となる領域選択パターンが増える。このことは、色彩の有無という図版条件の違いを正確に反応できていることを示唆している。また、5歳児の中では、幼児に特有とされる全体反応の出現は減少する。その中でも比較的発達しているとされる部分決まりの全体反応が一部にみられる程度になる。その代わりに、それよりも発達した段階で出現するとされる Confabulatory Combination を典型的に示す幼児がみられた。把握型の関連で4歳児と5歳児の間で最も大きく変わるものが形体認知の正確さである。つまり、4歳ではほとんどの幼児がいまだ20%を切る F+ を示すのに対し、5歳児になると50%を超える幼児が半数以上を占める。このような正確な形体反応の発達は、関わりの様態で見られた検査時の様子の変化と符合するものである。すなわち、「インクの染みを何かに見立てる」過程が媒介することで、シンボルを介して直接知覚されることのない事物を正確に再現することが可能となっているのである。

一方で、体験型に関しては、4歳児と5歳児の変化は穏やかである。つまり、両年齢ともに形体のみを用いた反応である F の割合が高い。言い換える

ならば、それ以外の色彩要因、運動要因の参加は微弱である。色彩反応に関していえば、4歳児では色彩のみで決定づけられた pure C が全色彩カードで典型的にみうけられる。それに対し、5歳児ではいわゆる色彩反応の特殊型の出現がみられるようになる。いずれにしても形体と色彩の複合的認知はいまだ生じていないようである。運動反応も両年齢でいまだ少ない。4歳児では運動反応はみられない。5歳児になると、一部の子どもで人間運動反応や動物運動反応とスコアされる反応がみられる。しかしながら、運動感覚の参加が不明瞭であったり、形体認知が F- であったりして、運動反応とスコアすべきか迷うものが多い。なお、運動反応がみられた5歳児では検査時の体動やジェスチャーなどの体の動きがみられない。4歳児に比較的広く認められた体動の減少とともに運動反応が現れてきているとみると、非常に興味深い変化であるといえる。

② 5歳児から6歳児にかけての発達的变化

以上の4歳児から5歳児の変化と比較して、5歳児から6歳児への変化はやや複雑で、特徴をつかみがたい印象がもたれる。その中でも課題への関わりの様態については、比較的明瞭な変化がみられる。つまり、6歳になると、幼児は集中して図版を見続けるようになる。この段階でも見てすぐに反応する感覚的な反応がいまだ多くみられる。ただし、ほとんどの幼児がかなりの時間をかけて反応について考えている。このことは Failure の消失、ならびに、反応数の増加に現れている。検査実施時の体動は多くの幼児でみられなくなり、ジェスチャーや擬態語での説明が減って言語による説明が増える。このことは、何かに見立てる際の着想を対象化して体験することができていることを示唆する。わずか1名ではあるが、インクプロット法に積極的な関心を示す子もみられた。

一方で、把握型に関しては、両年齢の差異は明確ではない。いずれも全体反応が優勢な反応領域の分布を示すものと、無色彩カードでは全体反応が優勢であるのに対し、色彩カードでは部分反応が優勢となる領域分布を示すものが含まれている。ただ、6歳児の中には、色彩の違いではなく、より領域の狭窄した特徴を示すものも含まれ、領域分布の多様化がみられる。くわえて、幼児に特有とされる全体反応の出現についてもあまり変化はない。いずれの群でも典型的な Perseveration はみられないが、部分決まりの全体反応は一定程度みられる。そのほか、もう少し進んだ段階で出現するとされる Confabulatory Combination が少数ながらもみられた点でも共通している。さらに、6歳児の方が5歳児よりも正確な形体認知に依る反応の割合が低下していた。先行研究では発達に伴う F+% の増加が一

貫して示されているので、この結果は意外であった(小川・松本, 2005; 辻, 1997;)。ただし、この結果は、6歳児の全体的な反応特徴の中で考慮されなければならない。つまり、前述のように6歳では5歳よりも反応数が増加している。このような反応数の増加によって、インクプロットの形状からずれた反応の出現を促された可能性が考えられる。その意味では、このような変化は6歳児特有の反応の多様化を反映しているのかもしれない。

把握型に比べると、体験型については多少一貫した発達的变化を見出すことができる。つまり、5歳児においては不特定色彩反応や強制的形体色彩複合などの色彩反応の特殊型が多くみられたのに対し、6歳児では「火」系列の反応や「花」反応のような典型的な色彩反応が比較的多くの幼児にみられた。このことは、6歳児がある程度色彩を反応の決定要素として使用できるようになったことを示唆する。ただし、それらの反応も、一人につき多くても2, 3反応と限られたものである。加えて、質疑の説明に、明確な色彩に関する言及が含まれない場合が多い。その意味では、色彩反応の萌芽的な段階にあたるのではないと思われる。一方で、運動反応については5歳児と6歳児では大きな変化は確認しにくい。いずれの群においても少数の運動反応はみられるものの、運動感覚の参加が不明瞭であったり、反応の認知に継時性が関わったりしている場合が多い。形体認知が不正確なものも含めて、一次性的運動反応の産出にはいまだ至っていないことが推測される。

以上のように各年齢群での発達的变化を検討してきた。その中ではかなり明瞭な反応の変化が観察されたのは4歳から5歳にかけてである。この間に幼児は、インクの染みを何か他の事物になぞらえる「見立て」の作業が可能となるし、そのことが正確な形体認知に基づく反応の増加に結びついている。この年代は、シンボル表象の発達との関連でいえば、「心の理論」が獲得される時期と符合する。したがって、上記の発達的变化が推定されることの知見としての重要性は大きい。

一方で、5歳から6歳への発達的变化は複雑で、ややつかみにくいものであった。この点についてはさまざまな理解と解釈が可能である。ただし、その中で一つ想定できるのが、ちょうどこの年齢時期からインクプロット法が人の個性を反映したものとなるという先行知見との関連である(Exner & Weiner, 1995)。つまり、このような発達的变化の複雑さには、反応の個性化が関係しているのかもしれない。反応数が増えるとともに反応に個性的な特徴が表れ始めるこの年齢段階の特徴が、この年代間での発達的变化の複雑さに結びついている可能性が

考えられる。

《引用文献》

- 相澤直樹 (2016) . 表象作用の発達からみたロールシャッハ法 日本ロールシャッハ学会第20回大会
- Aizawa, N. (2022). Rorschach and representational functions from developmental perspectives. *Rorschach Centenary Congress 2022 Abstract Book*.
- 相澤直樹 (2024) . ロールシャッハ法と絵画的表象の発達に関する文献的検討 日本発達心理学会第35回大会
- Ames, L. B., Métraux, R., Rodell, J. L., & Walker, R. (1995). *Child Rorschach responses: Developmental trends from 2 to 10 years*. Jason Aronson. (Original work published 1974)
- Callaghan, T., & Corbit, J. (2015). The development of symbolic representation. In L. S. Liben, U. Müller, & R. M. Lerner (Eds.), *Handbook of child psychology and developmental science: Cognitive processes* (7th ed., Vol. 2). (pp. 250-295). John Wiley & Sons.
- Exner, J. E., & Weiner, I. B. (1995). *Assessment of children and adolescents: The Rorschach: A comprehensive system* (2nd ed., Vol. 3) . John Wiley & Sons.
- DeLoache, J. S. (2000). Dual representation and young children's use of scale models. *Child Development*, 71(2), 329-338.
- Ford, M. (1946). *The application of the Rorschach test to young children*. Greenwood.
- Fox, J. (1956). The psychological significance of age patterns in the Rorschach records of children. In B. Klopfer (Ed.) *Development in the Rorschach technique volume II: Fields of application* (pp. 88-103). World Book.
- Leichtman, M. (1996). *The Rorschach: A Developmental Perspective*. Analytic Press.
- Lillard, A. S. (2015). The development of play. In L. S. Liben, U. Müller, & R. M. Lerner (Eds.), *Handbook of Child Psychology and Developmental Science: Cognitive processes* (7th ed., Vol. 2., pp. 425-468). John Wiley.
- Meili-Dworetzki, G. (1956). The development of perception in the Rorschach. In B. Klopfer (Ed.) *Development in the Rorschach technique volume II: Fields of application*. (pp.104- 176). World Book.
- Müller, U., & Racine, T. P. (2010). The development

of representation and concepts. In W. F. Overton & R. M. Lerner (Eds.), *The handbook of life-span development* (Vol 1) Cognition, biology, and methods (pp. 346-390). John Wiley & Sons.

小川俊樹・松本真理子 (2005). 子どものロールシャッハ法 金子書房.

Perner, J. (1991). *Understanding the representational mind*. MIT Press.

Piaget, J. (1999). *Play, dreams and imitation in childhood*. (C. Gattegno & F. M. Hodgson Trans.). Routledge. (Original work published 1951)

Rakoczy, H., Tomasello, M., & Striano, T. (2006). The role of experience and discourse in children's developing understanding of pretend play actions. *British Journal of Developmental Psychology*, 24(2), 305-335.

辻悟 (1997) ロールシャッハ検査法—形式・構造解析に基づく解釈の理論と実際 金子書房

辻悟・福永知子 (2018) 改訂版ロールシャッハ・スコアリング—阪大法マニュアル 金子書房

【付記】

本研究は JSPS 科研費 JP24K06501 の助成を受けたものである。また、調査の実施にあたり、神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程の鈴木田英里さん（現同志社大学心理学部助教）、同前期課程の池田歩加さん、松村幸保さん、同大学国際人間科学部の宮本聡太さん、喜田望生季さんには貴重なご協力をいただきました。